

2018年12月11日「経済数学」小テスト解答

**I**  $I$  を  $\mathbf{R}$  の开区間とします.  $f : I \rightarrow \mathbf{R}$  が凸関数であるとして. このとき  $x_1, x_2, x_3 \in I$  が  $x_1 < x_2 < x_3$  を満たすとき

$$\frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} \stackrel{(*)}{\leq} \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \stackrel{(**)}{\leq} \frac{f(x_3) - f(x_2)}{x_3 - x_2}$$

を証明しましょう. 最初の不等式 (\*) は,  $x_2$  を

$$x_2 = (1-t)x_1 + tx_3$$

と  $0 < t < 1$  を満たす  $t$  を用いて表すとき

$$f(x_2) \leq (1-t)f(x_1) + tf(x_3)$$

が成立することを用います.

解答  $x_2 = (1-t)x_1 + tx_3$ ,  $0 < t < 1$  を満たす  $t \in \mathbf{R}$  が存在します. このとき  $f$  が凸関数であることから

$$f(x_2) \leq (1-t)f(x_1) + tf(x_3)$$

が成立します. このとき

$$\begin{aligned} \frac{f(x_2) - f(x_1)}{x_2 - x_1} &\leq \frac{(1-t)f(x_1) + tf(x_3) - f(x_1)(1-t)x_1 + tx_3 - x_1}{t(x_3 - x_1)} \\ &= \frac{t(f(x_3) - f(x_1))}{t(x_3 - x_1)} = \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \end{aligned}$$

が成立します. 他方

$$\begin{aligned} \frac{f(x_3) - f(x_2)}{x_3 - x_2} &\geq \frac{f(x_3) - (1-t)f(x_1) - tf(x_3)}{x_3 - (1-t)x_1 - tx_3} \\ &= \frac{(1-t)(f(x_3) - f(x_1))}{(1-t)(x_3 - x_1)} = \frac{f(x_3) - f(x_1)}{x_3 - x_1} \end{aligned}$$

も成立します.

**II (2)**  $p > 1$  のとき  $f(t) := t^p$  が  $I = (0, +\infty)$  上で狭義の凸関数であることを示しましょう.

(2)  $x, y > 0$ ,  $x \neq y$ ,  $0 < \alpha < 1$  のとき, 不等式

$$((1-\alpha)x + \alpha y)^p \leq (1-\alpha)x^p + \alpha y^p$$

が成立することを証明しましょう.

解答 (1)  $f'(t) = pt^{p-1}$ ,  $f''(t) = p(p-1)t^{p-2} > 0$  が  $t > 0$  に対して成立しますから,  $f(t)$  は  $I = (0, +\infty)$  上狭義の凸関数であることが分かります.

(2) (1) から  $0 < a < b$  のとき

$$((1-t)a + tb)^p < (1-t)a^p + tb^p \quad (0 < t < 1)$$

が成立します.

$X < y$  のとき  $x = a, y = b, \alpha = 1 - t$  として

$$(\alpha x + (1 - \alpha)y)^p \leq \alpha x^p + (1 - \alpha)y^p$$

が従います.

$X > y$  のとき  $x = b, y = a, \alpha = t$  として

$$(\alpha x + (1 - \alpha)y)^p \leq \alpha x^p + (1 - \alpha)y^p$$

が従います.

**III**  $f: (a, b) \rightarrow \mathbf{R}$  が凸関数とします.

$$U := \{(x, y); a < x < b, y > f(x)\}$$

が凸集合となることを示しましょう.

解答  $(x_0, y_0), (x_1, y_1) \in U$  とします. このとき

$$a < x_0, x_1 < b, \quad f(x_0) < y_0, \quad f(x_1) < y_1$$

が成立します.  $0 < t < 1$  を満たす  $t \in \mathbf{R}$  に対して

$$x_t = (1-t)x_0 + tx_1, \quad y_t = (1-t)y_0 + ty_1$$

と定めて  $P_t(x_t, y_t) \in U$  ( $0 < t < 1$ ) を示します.

(i)  $x_0 = x_1$  のとき  $x_t = x_0$  となります. このとき

$$y_0 > f(x_0), \quad y_1 > f(x_1) = f(x_0)$$

が成立することから,  $0 < t < 1$  のとき

$$y_t = (1-t)y_0 + ty_1 > (1-t)f(x_0) + tf(x_0) = f(x_0) = f(x_t)$$

から  $P_t \in U$  が成立します.

(ii)  $x_0 \neq x_1$  のとき  $x_0 < x_1$  としても一般性は失いません. このとき  $f$  が凸関数であることから  $0 < t < 1$  のとき

$$f(x_t) \leq (1-t)f(x_0) + tf(x_1) < (1-t)y_0 + ty_1 = y_t$$

から  $P_t(x_t, y_t) \in U$  が成立します.

**IV**  $U_1, U_2$  を  $\mathbf{R}^2$  の凸集合とします.  $U_1 \cap U_2$  が凸集合となることを証明しましょう.

解答

$$P \in U_1 \cap U_2 \Leftrightarrow P \in U_1 \text{ AND } P \in U_2$$

に注意しましょう。  $P_0(x_0, y_0), P_1(x_1, y_1) \in U_1 \cap U_2$  とします。  $0 < t < 1$  を満たす  $t \in \mathbf{R}$  に対して

$$x_t := (1-t)x_0 + tx_1, \quad y_t := (1-t)y_0 + ty_1$$

として  $P_t$  を定めます。  $P_1, P_2 \in U_1$  で  $U_1$  が凸集合であることから

$$P_t \in U_1 \quad (0 < t < 1)$$

が従います。 さらに  $P_1, P_2 \in U_2$  で  $U_2$  が凸集合であることから

$$P_t \in U_2 \quad (0 < t < 1)$$

が従います。 以上から

$$P_t \in U_1 \cap U_2 \quad (0 < t < 1)$$

が分かりますから、  $U_1 \cap U_2$  は凸集合です。

$\forall \alpha, \beta > 0$  とします。 第 1 象限  $\mathbf{R}_{++}^2$  上の函数

$$u(x, y) := x^\alpha y^\beta$$

が凹関数である必要十分条件が

$$\alpha + \beta \leq 1$$

であることを示しましょう。

解答

$$f_x = \alpha x^{\alpha-1} y^\beta, \quad f_y = \beta x^\alpha y^{\beta-1}$$

$$f_{xx} = \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta, \quad f_{xy} = f_{yx} = \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1}, \quad f_{yy} = \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2}$$

となります。 これを用いて  $f$  の Hesse 行列式を求めると

$$\begin{aligned} \det(H(f)(x, y)) &= \begin{vmatrix} \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta & \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1} \\ \alpha\beta x^{\alpha-1}y^{\beta-1} & \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2} \end{vmatrix} \\ &= \alpha\beta(\alpha-1)(\beta-1)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} - \alpha^2\beta^2 x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \\ &= \alpha\beta(1-\alpha-\beta)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \end{aligned}$$

となります。

$f$  が凹関数である必要十分条件は

$$f_{xx}(P), f_{yy}(P) \geq 0, \quad \det(F(f)(P)) \geq 0 \quad (P \in \mathbf{R}_{++}^2)$$

です。

$$f_{xx}(x, y) = \alpha(\alpha-1)x^{\alpha-2}y^\beta \leq 0$$

が任意の  $x, y \in \mathbf{R}_+$  に対して成立する条件は  $\alpha \leq 1$  です。 同様に

$$f_{yy} = \beta(\beta-1)x^\alpha y^{\beta-2} \leq 0$$

が任意の  $x, y \in \mathbf{R}_+$  に対して成立する条件は  $\beta \leq 1$  です。さらに

$$\det(H(f)(x, y)) = \alpha\beta(1 - \alpha - \beta)x^{2(\alpha-1)}y^{2(\beta-1)} \geq 0$$

が任意の  $x, y \in \mathbf{R}_+$  に対して成立する条件は  $\alpha + \beta \leq 1$  です。以上で、 $f$  が凹関数である必要十分条件が

$$\alpha \leq 1, \beta \leq 1, \alpha + \beta \leq 1$$

であることが示されました。 $\alpha, \beta > 0$  であるとき  $\alpha + \beta \leq 1$  ならば  $\alpha, \beta \leq 1$  が従いますから、この条件は

$$\alpha + \beta \leq 1$$

と必要十分です。

**VI** 2次対称行列  $A = \begin{pmatrix} a & c \\ c & b \end{pmatrix}$  に対して、以下の条件 (i), (ii), (iii) が必要十分であることを示します。

$$\left( A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) \geq 0 \quad \left( \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^2 \right) \quad (\text{i})$$

$$A \text{ の固有値 } \alpha, \beta \text{ が } \alpha, \beta \geq 0 \text{ を満たす。} \quad (\text{ii})$$

$$a, b \geq 0, |A| \geq 0 \quad (\text{iii})$$

(1)  $A$  が回転行列を用いて対角化できることを用いて (i)  $\Leftrightarrow$  (ii) を示しましょう。

(2) (i) を仮定すると  $a, b \geq 0$  が導かれることを示しましょう。

(3) (ii) が成立すると  $|A| \geq 0$  が成立することを示しましょう。

(4)

$$\Phi_A(\lambda) = (\lambda - \alpha)(\lambda - \beta) = \lambda^2 - (a + b)\lambda + |A|$$

から従う

$$\alpha + \beta = a + b, \quad \alpha\beta = |A|$$

を用いて (ii)  $\Leftrightarrow$  (iii) を示しましょう。ここで  $p, q \in \mathbf{R}$  に対して

$$p, q \geq 0 \quad \Leftrightarrow \quad p + q \geq 0, pq \geq 0$$

であることを用います。

**解答 (1)** 回転行列  $R$  が存在して

$$R^{-1}AR = \begin{pmatrix} \alpha & 0 \\ 0 & \beta \end{pmatrix}$$

と対角化できますが、これから  $\begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} = R \begin{pmatrix} \xi \\ \eta \end{pmatrix}$  と回転座標変換を用いると

$$\left( A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) = \alpha\xi^2 + \beta\eta^2$$

となります。

(i)⇒(ii)  $R = (\vec{r}_1 \ \vec{r}_2)$  と列ベクトルを定めます。このとき

$$A\vec{r}_1 = \alpha\vec{r}_1, \quad A\vec{r}_2 = \alpha\vec{r}_2$$

となります。これを用いると

$$0 \leq (A\vec{r}_1, \vec{r}_1) = (\alpha\vec{r}_1, \vec{r}_1) = \alpha(\vec{r}_1, \vec{r}_1) = \alpha$$

$$0 \leq (A\vec{r}_2, \vec{r}_2) = (\beta\vec{r}_2, \vec{r}_2) = \beta(\vec{r}_2, \vec{r}_2) = \beta$$

から  $\alpha, \beta \geq 0$  が分かります。

(ii)⇒(i)  $\alpha, \beta \geq 0$  のとき

$$\left( A \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} x \\ y \end{pmatrix} \right) = \alpha\xi^2 + \beta\eta^2 \geq 0$$

となります。

(2)

$$0 \leq \left( A \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} \right) = a, \quad 0 \leq \left( A \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \right) = b$$

(3)  $\Phi_A(\lambda) = \lambda^2 - (a+b)\lambda + |A| = 0$  の解と係数の関係から  $\alpha + \beta = a + b$ ,  $\alpha\beta = |A|$  が従う。  $\alpha, \beta \geq 0$  のとき

$$|A| = \alpha\beta \geq 0$$

が成立する。

(4) (ii)⇒(iii)

$$a + b = \alpha + \beta \geq 0, \quad ab \geq ab - c^2 = |A| = \alpha\beta \geq 0$$

から  $a, b \geq 0$  と  $|A| \geq 0$  が従います。

(iii)⇒(ii)

$$\alpha + \beta = a + b \geq 0, \quad \alpha\beta = |A| \geq 0$$

から  $\alpha, \beta \geq 0$  が従います。

**VII**  $\alpha, \beta > 0$  とします。第 1 象限  $\mathbf{R}_{++}^2$  上の関数

$$u(x, y) := \alpha \log x + \beta \log y$$

が狭義の凹関数であることを示しましょう。

解答

$$u_x = \frac{\alpha}{x}, \quad u_y = \frac{\beta}{y}$$

$$u_{xx} = -\frac{\alpha}{x^2}, \quad u_{xy} = u_{yx} = 0, \quad u_{yy} = -\frac{\beta}{y^2}$$

となります。

$$u_{xx} = -\frac{\alpha}{x^2} < 0$$

$$\det(H(u)(x, y)) = \begin{vmatrix} -\frac{\alpha}{x^2} & 0 \\ 0 & -\frac{\beta}{y^2} \end{vmatrix} = \frac{\alpha\beta}{x^2y^2} > 0$$

から  $u$  が第 1 象限  $\mathbf{R}_{++}^2$  上狭義の凹関数であることが分かります。